

総括議論

司会 藤井慎太郎
司会・コーディネーター 秋野有紀

熊教授、由准教授、シユナイダー教授、贾教授、クレック准教授、シユタンツェル教授が登壇し、早稲田大学の藤井教授とドイツ語学科の秋野専任講師を司会として、会場からの質問に登壇者が答える形で活発な討論が行われた。会場からの質問も様々に興味深く、極めて有意義な討論となった。

①日本のネガティブ・ソフト・パワーについて…ネガティブ・ソフト・パワーは長期的に影響があるときに使われる概念。日本では、過去への向き合い方がいくつかの国にとつてネガティブ・ソフト・パワーに当たる。(シユタンツェル教授)。

②中国映画の急速な発展の背景…映画産業は相対的に競争の激しい分野で、技術の進歩により大都市でのマルチメディアのスクリーン数も急激に増えている。映画鑑賞人口が増え、スクリーン1枚あたりの興行生産高が近年プラスに転じ、映画産業全体が活気づいた。1度も映画を見ない人は中国では0.9%であり、欧州に比べてもその潜在的市場規模が大きい(贾教授)。

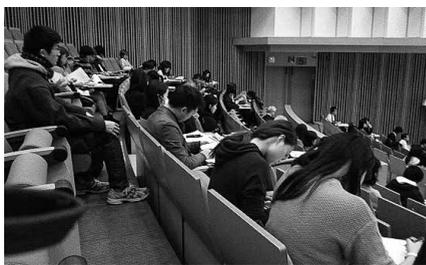


ルマー・ホフマン)だ。またスマー
ト・パワーであれ文化外交であれ、
究極的には国家コンセプトで競争
を促し、権力構造を確立していこ
うという昔ながらの国民国家の
構図のもとにある。文化外交は芸
術家を利用し道具化してしまい、
本来自由なはずの文化をなくして
しまう。文化的な関係は重要な国
際的関係ではあるが、外交の枠を
超えて考えたい(シユナイダー

教授)。

④文化は経済的に恵まれた人のものだと思うが、文化政策を通じて格差を縮小できるのか…文化概念について民主的に考える必要がある。ハイ・カルチャー、サブ・カルチャー、ポップ・カルチャー、アマチュア、プロというカテゴリーをせず、文化をひとつのランドスケープと捉え、そのランドスケープをケアしていくことが大切だ。そう考えると、文化を独占しているのがエリートというのではなく、才能溢れたプロも趣味で踊っている若者もみな文化というランドスケープの構成員なのだ(シユナイダー教授)。ヘルマン・グラザーの「全ての人のための教育」というコンセプトを紹介したい。その際、何

ワーを賢く組み合わせさせたスマート・パワー(ジョセフ・ナイ)を使って説明する。中国は文化を、多元的で、諸文化の価値に優劣はなく、非排他的で包摂的・共存的で、互いに学びあうものと理解する。現在中国には経済・政治・文化・社会等を一体として発展させる計画があり、文化と国家は切り離せない。こうした視点から一帯一路では、歴史の伝達、他国との文化交流、経済・貿易の協力、イノベーションの未来の4つの道を考えている。中国の文化の未来については、毛沢東の世界の民族の文化の頂に立ち、世界の他の国の人々とともに幸せな生活を追求する、という言葉を用いた(熊教授)。これに対し、文化をヒエラルキー的に考えたいと解決策にはならない、ノーベル文学賞をとつたらハイ・クラスであるとか、人気があるからよいということではなく、誰がその文化生活に参加するのを見なければならぬ。欧日の文化交流ではこれまで、エリート層に標準が定められ、広く一般の人々や地方の人々、次世代を担うはずの子ども・学生・若者が忘れられていたことを反省している。文化政策の最終目標は「全ての人のための文化(ヒ



らかの文化を未開のもの、程度の低いものとして耕すという考え方はもはやできず、文化の多様性を尊重し、双方向の交流を行う姿勢こそが重要だ(クレック准教授)。文化の主体は人民だ。ならば文化の発展は、人々が決めるべきである。規制から自治を経て、ともに治めるという段階に至らねばならない。多くの主体が多元的に、文化政策を決定すべきだ。金のある者は金を出し、金のないものは力を出し、力もないものは能力を出すと中国の言い方がある。こうしたことで文化の格差は縮小されていき、様々な文化の人がいる中で価値と価値の架け橋が出来れば、人々の幸せな生活へと繋がっていく(贾教授)。各登壇者にはこのフォーラムの企画時点で、多様性、創造性、効率性という3つの鍵概念を挙げ、これらが掛け合わさったときにそこにリスクが生まれるか、可能性が広がらるか、という問いを投げかけてあった。文化を形成する主体が住民である、ということに関しては全ての登壇者が共有しているようだが、政府の立ち位置としてどのような枠組みを文化に「提供」できるかと考えるか、あるいは文化をどのよ



うに「利用」しようと考えるかによって、この掛け合わせから可能性が生まれるか、危険性が生じるかの分かれ道になる。各自が各自のことをする、つまり文化は文化のこと、経済は経済のこと、政治は政治のことを自律的に行い、それぞれが能力を文化のために、内容には口を出さずに協働させていくならば、それぞれの輪が大きな渦になり循環的に広がっていくのではないか（秋野専任講師）。

⑤文化と外交を切り離すべきか…国家はソフト・パワーを作り上げてはいない。しかし国家は利用しようとする。5000年続いた国はないが、文化はある。こうした文化を維持してきたのは文化を支えようとした人々である。文化と



国家が交差することはしばしばある。公共資金が歌劇場の渡航費を準備すれば、歌劇場も世界的な評判を高めることができ、Win-Winの関係になる。それゆえに完全に切り離すべきであるとまでは言えない。しかし国が創造性を操作・制限・管理しようとする局面では厳格に分離しなければならぬ。国は文化を創ることはできない（シユタンツェル教授）。

Profile
司会・コーディネーター
秋野有紀
AKINO, Yuki

Profile
司会
藤井慎太郎
FUJII, Shintaro



●早稲田大学文学部教授（演劇学、文化政策学）。フランス語圏（フランス、ベルギー、カナダ）および日本の現代舞台芸術の美学と制度を研究。主な著作に監修書「ポストドラマ時代の創造力」（白水社）、「Contes, fables et contes japonais : éblouissements」、共訳書「演劇学の教科書」（国書刊行会）、共著書「演劇学のキワーンズ」（ヘリカン社、2013年度ドラマ・フィルム・ルック養成プログラム、責任者）、「炎」アンサンブルの翻訳で、小田島雄志翻訳戯曲賞を受賞。

●ドイツ語学専任講師。博士（エルデハイム大学、東京外国語大学）。専門はドイツ語圏の文化・メディア政策（メディア制度、劇場政策、対外文化政策）、サクセン文化基礎研究所シニアフェロー、日本学術振興会特別研究員（P.D. 東京大学）を経て、2013年より現職。共著「Kultur im Spiegel der Wissenschaften」(Outure also sprach)、[芸術と環境 劇場制度・国際交流・文化政策]（論創社）等。